

「いきいきした子ども」はどのようにして 教育理論に取り込まれたか？

ユルゲン・エルカース

(訳：樋口 聡・鈴木由美子)

(2007年2月28日受理)

How did the “Active Child” come into Educational Theory?

Jürgen OELKERS

The term “active child” has been coined during the era of progressive education at the beginning of the 20th century. John Dewey spoke of the “Copernican revolution” in education that took place when education turned to the child. However the object of this term is much older. The child as an active learner is shown in Dutch paintings of the 17th century, and the didactic concept of active learning goes back to the English Enlightenment. One outstanding example is the book on *practical learning* that was published by Richard and Maria Edgeworth in 1798. Already here can be found the concept of “learning-by-doing” that is usually attributed to American pragmatism a hundred years later. Even religious hymns referred to children that should learn in active way. American sources, on the other hand, show that the vision of active children became part of the popular culture before Pragmatism started. One of these sources were journals for children and youngsters that were widely read in the 19th century. The cover pictures of these journals developed continually the image of the active child that discovers the world outside school. The same is true for novels and narrations. So as matters stand the “active child” was not invented by progressive education. On the contrary, progressive education would not have been possible without the cultural image of discovery and active learning. This image did not exist a hundred years earlier. The image is the background of almost every theory of modern education.

Key words: Progressive education, Enlightenment, Active child, Practical learning, Popular culture

キーワード：進歩主義教育、啓蒙、いきいきした子ども、実践的な学び、大衆文化

「いきいきした子ども」は、進歩主義教育の特徴を示す言葉でありスローガンである。進歩主義教育は子ども中心の教育とも呼ばれる。ジョン・デューイは、進歩主義を表現する有名なメタファーを造り出した。1899年、シカゴ大学附属小学校の保護者と生徒に向けて、デューイは教育における「コペルニクス的革命」について述べた。それは子どもへのシフトである。このメタファーは、新教育は子どもの学習に焦点を合わせることを意味していた。旧教育の焦点は、教師、教科書など子ども以外のものだったのである。デューイ(1907)は次のように書いている。

この考え〔旧教育〕では、子どもの生活について語

られることは多くはない。子どもの勉強について多くのことが語られることはあっても、学校は子どもが生活する場所ではないのである。今私たちの教育に起こりつつある変化は、重心のシフトである。これは宇宙の中心を地球から太陽にシフトさせたコペルニクスによって導かれたのと同じ変化であり、革命である。そこでは子どもが太陽である。そして教育の営みはその周りを回転する。子どもは教育組織の中心である。(p.51)

Experience and Education (1938)において、デューイ(2002)は、子どもだけを中心にして子ども中心の教育という形で1920年代に進歩主義教育を形成したラデ

イカル・エデュケーショナル・アプローチから距離を取った。デューイは、学校や教授が経験としてのみ関心を持たれることを容認しなかった。実際、こうした考えはドイツ語圏の教育学においても主張された。(Hofer&Oelkers, 1998)

1899年のいきいきした子どもについてのデューイの見解、とりわけ教育におけるコペルニクス的革命というメタファーは、国際的な文献においてセンセーションを引き起こした。このメタファーはすぐに有名になり、「新教育」を示すものとして多く引用された。「子ども中心」は次のような教育のプログラムであった。

- ・ 18世紀のように、「子どもの本性」といったことを簡単に言わない。
- ・ 19世紀のように、すべての子どもが学校の恩恵を受けることを求めない。
- ・ そうではなくて、一人ひとりの子どもを、それぞれのそしてすべての人を、正当に扱うことを求めるものである。

「子どもの本性」は、心理学的に見られた。それゆえ、伝統的な学校は子どもの要求または興味の点から批判されたのである。ここから、明らかに新教育を形作り今日までインパクトを与え続けている、影響力のある対立図式が生じた。すなわち、

- ・ 子ども 対 カリキュラム
- ・ 個人 対 制度
- ・ 個人的興味 対 教育的秩序
- ・ 自由な経験 対 画一化された教授、などである。

こうした二元論は、国際的な進歩主義教育において、様々な運動や賛同者たちによって展開され、示された。これらに関連して、有力で影響力のある大衆向けの出版物が、教育についての世論の形成に影響を与え続けた。左翼の知識人、哲学者、芸術家たちの論考は、基本的に新教育の立場に立つオルタナティブ・スクールを是認していた。オルタナティブ・スクールは未来の教育をデザインする唯一の道として描かれた。これに関連して伝統的な学校に対する強い批判が起こり、すでに早くから伝統的な学校は、反子ども (anti-children) で、役に立たないものとして描かれた。

しかしながら、1899年の「いきいきした子ども」という見解は、新しいものではなかった。この意味において「新教育」はそれ自身が主張するほど新しいものではなかったのである。18世紀後半のイギリス啓蒙主義の文献から一つの例をあげよう。1798年にリ

チャード・ラヴェル・エッジワース¹と彼の一番上の姉マリア・エッジワース²は、書物によってではなく、子どもの活動やいきいきした経験によって導かれた「実践的教育」を描いた。エッジワースと彼の姉は、イギリス・パーミンガムの月の会 (Lunar Society)³のメンバーだった。この会は、エンジニア、自然哲学者、作家ならびに発明家たちのグループであり (Burr, 2000)、実験や科学的発見の応用について語り合うために会合を開いた。この会は、1775年から、月の会と呼ばれるようになった⁴。その理由は、メンバーが毎月、家に帰るのに最も明るい、満月に近いときに集まったからである。

月の会は、イギリス中部地方の啓蒙主義の中心に位置した社交クラブの一つだった。これは、進化論を展開したチャールズ・ダーウィンの祖父であるエラスムス・ダーウィン⁵によって設立された。産業革命においてもっとも重要とされる発展をさかのぼれば、そのほとんどは月の会のメンバーに辿り着く。いくつか名前を挙げると、蒸気機関を発明したジェイムズ・ワット⁶、酸素を発見した聖職者であり化学者でもあるジョゼフ・プリーストリー⁷、地質学者のバイオニアであるジョン・ホワイトハースト⁸、建築家サムエル・ワイアット⁹、そして作家であり社会改良家でもあるトマス・デイ¹⁰が挙げられる。フランシス・ベイコンや英国学士院 (Royal Society) に起源をもつ「実験にもとづく学習 (experimental learning)」の原則は、実践的な形をとっていた。「実践 (practice)」は、新しい科学技術の発展にだけでなく、また日々の経験にも関連していた。

改革の一つの領域が教育だった。リチャード及びマリア・エッジワースは、試みとして、教育を、実践的な経験のプロセス、あるいは、「器用さと活動性の試み」と理解した。彼らの共著 *Practical Education* (Edgeworth & Edgeworth, 1798) は1798年に公刊された。この本では、観察法、実験、創意に富む精神が学習を導くと提唱された。学習は一種の探究のプロセスと見なされている。これはおそらく後に「発見学習 (discovery learning)」と呼ばれるものが、簡潔な教育用語として表記された最初だろう。同じことが、子どもの経験世界における遊びに満ちた学習の重要性にも当てはまる。エッジワースらは、子どもの本や教育玩具の「理性のあるおもちゃ屋」を遊びに満ちた学習に結び付けている。その本で提唱された原理は、子どもの学習を促進するものなら何でもよいとするプラグマティックのそれだった。エッジワースの大家族の多くのメンバーがこの本に寄稿した。その中には何人かの年長の子どもが含まれていた。したがって、ここでは「子ども中心」という言

葉はまったく文字通りに受けとられるのである (*The Works of Maria Edgeworth*, 2003 参照)。エッジワースの書物は、18 世紀の終わりにおいて大きな影響を及ぼすものだった。

「いきいきした子ども」は、進歩主義教育を基礎付けるが、しかし、それはまたキリスト教教育の歴史にもルーツを持っている。このことはほとんど考慮されてこなかった。イギリスの詩人アンナ・ラティンヤ・バーボールド¹¹は、*Hymns in Prose for Children*¹²を 1781 年に公刊した。この本は子ども中心の教育についての教育的見解に影響を与えた。この賛美歌の中で子どもたちは神を讃えるのに幼すぎることはないと学ぶ。そして子どもたちは、彼らの想像の世界が創造の場を持っていることを学ぶ。子どもたちは世界を発見し、世界とともに、神を発見する。カテキズムを暗記する必要はない。子どもたちは彼らの信念について問われることはない。子どもたちは自分自身でそれを問うことができるのだ。バーボールドの本の 6 番目の賛美歌は、「理性の子ども」に語りかけている。(「理性の子ども…なんじの目は何を見たか、なんじの足はどこをさまよったか」「理性の子ども」は彼が経験する世界についての判断を下すために理性を使う。「理性の子ども」は神の世界を見つめるために自分の目を開かなければならない。世界の中に歩み出て、世界を見つめ観察する時、彼は神の偉大さを悟るだろう (Barbauld, 1781, pp.36ff))

アメリカの進歩主義教育は、その出発点をこうしたいきいきした子どもにおいていた。それが、アンナ・バーボールドの著作のようなテキストに明確に言及していないとしても。しかし、子ども中心への方向付けは心理学の範囲内だけのことでなく、神学上の前提条件でもあった。子ども中心の教育はそれ自体から生じ、発展したのではなかった。アンナ・バーボールドは、これまた驚くことに、1797 年の *On Education* の中で、彼女自身の教育理論を示した。彼女は「教育」を経験と同一視したのである。——これはかなり後にジョン・デューイによって描かれた考え方である——。しかし、バーボールドは 1797 年のはじめ、次のような言葉を書いているのだ。(Barbauld, 1825)

この教育は全ての瞬間に行われる。それは時と同じように進む。あなたはそれを止めることも、そのコースを変えることもできない。(p.307)

子どもの習慣は、彼らの両親の習慣の影響を受けない。なぜなら、習慣は現在において形成されるので、過去、とりわけ両親の履歴とは関係がないからである。

教育に「格言」は存在しない。すなわち、私たちが自分たちの行動の根拠としうる指導原則や方法はない。子どもたちは大人たちの考えを見透かして、大人たちが説教することによってではなく、大人たちの行動によって大人たちの道徳性を判断する。バーボールド (1825) は、「できるだけ狡猾でいなさい。彼ら[大人たち]は常にあなたたちよりも狡猾です」(p.312) と述べている。

教育は一つの試みなのであって、特定の結果ではない、とバーボールド (1825) は続けている。そして、この試みはしばしば、多大な犠牲を払ってのみ達成される一種の「過剰な文化」である。

あなたはこの過剰な文化が、ほとんど何の効果ももたらさないのに気づかないのだろうか。また、どれだけ多くの賞賛されるべき優れた人物が、日々、薄暗い奥まった所から、ほとんど何も配慮されることなく、立ち上がっているのに気づかないのだろうか。(p.318)

バーボールド (1825) はまた、このような教育観に対してよく聞かれる反対意見を取り上げ、きっぱりと拒絶している。

それならば、子どもたちは放任されるべきなのだろうか。明らかにそうではない。子どもたちの生活状況が必要とする教授と技能を与えて、不必要な配慮を拒否しよう。子どもたちは、有益な行動へと駆り立てる良い手本や環境の無意識な影響によって、自分の人格を自ら形成することを信頼しよう。(pp.318-319)

こういう種類の理論は必ずしも成功するとは限らない。今日、「いきいきした子ども」という見解の歴史の中で、アンナ・バーボールドに対する言及を見ることはないだろう。しかし、こうした考えが、或る時点で教育論に取り込まれ、そのまま留まったことは明らかである。言及(引用)はしばしば、或る概念についてのインパクトや広がりやの尺度となる。その一つの言及は、児童文学への教育理論の応用である。

トマス・デイは、ルソーの忠実な信奉者であるが、*The History of Sandford and Merton* という題の 3 巻の子ども本を 1783-1789 年に公刊した。この本におけるデイの目的は、ルソーの自然教育の原則に社会批判を関連付けることであつた。*Sandford and Merton* は、19 世紀に多く読まれた¹³が、実践的教育にはほとんど貢献しなかった。読者は、富は教育に何ら貢献しないこと、贅沢は人間の本性の敵だということを知らされた。それは、トミー・マートンの物語である。マートンは、

ジャマイカのプランテーションを所有する金持ちのオーナーの、甘やかされたわんぱく息子だった。マートンは教育のためにイギリスに送られた。ここで彼は、ハリー・サンドフォードに出会う。サンドフォードは貧しい農民の息子で、自然で純真な徳を持っていて、道徳的に善になるために人為的な学校(学校教育)を必要とはしなかった。教師パーロウ尊師によって少年たちが教えられたように、人生において本当に重要な最低限のことを教えられるのであれば、田舎での自然な生活は、自分自身と調和して生きることができるために必要なことのすべてである。

トム・ソーヤーや オリヴァ・トウィストのような後の典型的な児童文学の登場人物は、ルソー主義者の人為的な道徳の反対にあると、その著者たちによって見なされていた。ルソー主義者は子どもが経験し感じていることをまさに理解しなかった。トマス・デイは、自然教育を受ける一人ではなく二人の息子を持つことによって、ルソーの *Emile* における根本的な状態を簡単に二重化した。デイは、ルソーのモデルの人為性を全く変えなかった。この意味で、「子ども中心」というお決まりのフレーズは、明らかにアンビヴァレントなものに思われた。なぜなら、それは子どもの活動に焦点を合わせることを試みる一方で、同時に、家庭教師を理解することで、まさにそれらの活動を操作することに焦点を合わせたからである。

多くの歴史的な説明において、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルは進歩主義教育を基礎付けた人物として持ち上げられている。ルソーからフレーベルへ、それは *Emile* から幼稚園へ、であり、そこにはおそらく「いきいきした子ども」という近代の見解を支持する、一連のテーマや概念がある。ペスタロッチはルソーから、フレーベルはペスタロッチからこの方向性を受け継いだと言われており、進歩主義教育はこれら三人によって方向付けられたと言われる。しかしながら、関連する著作が読まれたとは推測されるが、時代に即してそれを証明することはできない。ルソーの著作は進歩主義教育にとって主要な読書対象ではなかったし、1900年当時は、ペスタロッチは実際に研究されたというよりも、単に名前を上げられたに過ぎなかった。今日的な見方からすれば、理論的な概念はお互いに一致していないし、それらは「いきいきした子ども」にほとんど方向付けられていなかった。

ルソーの *Emile* を見てみると、そのことがわかる。*Emile* に結び付く自然教育の理論は、感覚主義の心理学または哲学に負っている。感覚主義の基本的な原則は以下のとおりである。感覚器官を通さないものは何も精神の中に入っていない。人は以前に文字通り

つかんだ、あるいは触れたもののみを、精神で「つかむ」。—これは今日なお一般的である単純な定式である。しかしこのことはまた、教育が強い制御幻想と結び付きうることを意味している。もしすべての学習が、精神構造が形成される前に感覚を通して行われるものだとすれば、教育は精神の建築家と呼ばれうるだろう。なぜなら、教育は情報をほとんど完全にコントロールするからである。

このことはまさにルソーが *Emile* で描こうとしたことである。すなわち、理性を事物による感覚学習によって形成することである。子どもは潜在的可能性を持たない。言い換えると、精神は、最初は真っ白な状態、つまり一種のタブラ・ラサであり、中に入ってくるものを処理する際に、自分自身のフィルターを通すことなく、そのまま吸収する。こうした理由で、エミールは人為的な人物であり、現代の読者にとって何かロボットのように見えるのは不思議なことではない。ルソーの同時代人は、もちろん、異なった読み方をした。彼らはそこで描かれた教育の可能性の称賛に満たされたか、または、ルソーが自分自身を伝統的教育から遠く距離をおいて捉える大胆さに憤慨するか、だった。

Emile には、生きるための感覚主義的方法と厳格なルールとが混在している。ルソーはあらゆる贅沢は人間に害を与えると確信していた。もっぱらこの理由から、ルソーはパリでは風変わりな人間だと思われていたが、彼が多くの読者を引き付けたのは、まさにこうした混在なのである。彼らは「自然教育」を生活のための準備と捉えた。その生活とは、社交生活の宮廷ぶった形式などなく、不節制も煩瑣もなく、結局のところまったく無意味でしかない絶え間ない娯楽によって確実に気が散らされることもない生活のことである。ルソーは、贅沢を擁護し、自然生活を再び野蛮に立ち戻るものと見なしたヴォルテールを、敵だと思なした。

ヴォルテールは、1755年8月30日付のルソーに宛てた手紙 (Voltaire, 1978) のなかで、彼はこの「自然な態度 (allure naturelle)」を、彼よりももっと価値がある人々のために残しておくつもりだと述べている。彼自身はイロコイ族と住むためにカナダに出かけることはできなかっただろう。なぜなら、彼がかかっている病気はヨーロッパでしか治療できなかったからである。ミズーリ族には医者はいなかった。それに加えて、ヴォルテールは、カナダのインディアンはおそらくヨーロッパ人と同じくらい悪く (有害な)、自然生活を送ることはほとんど期待できないと書いた。いずれにせよ、粗野な人々の間で孤立して平和な生活を送るのに、彼自身適していなかった。ルソーもそうだったと付け加えねばならないだろう。ヴォルテールは、その

時60歳を越えていた。若い世代に向けて書いたのは彼ではなくルソーだった。若い世代は彼の考えにわくわくした。

しかしこのことは、結果として、いきいきした子どもを教育理論にとりこむルソーからペスタロッチ、フレーベルへのラインを代々なぞることができることを意味していない。もし私たちが「教育理論」を、様々な文化における様々なレベルの多様な教育問題についての社会的省察だと理解するならば、この三人の論者の全体だけで決定的であったなどとはなりえない。この考えはまた、教育の文献だけがいきいきした子どもという見解に影響を与えたという誤解を招きやすい。17世紀の芸術の例は、いきいきした子どもという見解がルソーの時代よりも古くからあること、そしてそれらは1762年における *Emile* の出現の前兆であったことを示している。

オランダの画家、フランス・ハルスは1620年に、*The Infant Catharina Hooft with her Nurse* を描いている (Bedaux & Ekkart, 2001, p.15)¹⁴。この絵は楽しさに満ち、遊んでいるような様子を示している。幼い女の子は、華美に装い着飾っているけれども大人のミニチュアのようにではない。何よりここに描かれている教育的関係は宗教的な含蓄を含んでいない。この子どもは神聖な



Frans Hals. *The Infant Catharina Hooft with her Nurse*. c. 1619-20. Oil on canvas; 86 x 65 cm. Staatliche Museen zu Berlin, Germany.

子どもではない。むしろいたずら好きそうな微笑みをたたえ、かすかな好奇心を持ち、機敏な顔つきをした子どもであり、神聖な聖堂のために用意されたものではない。乳母が子どもに向けて見せる配慮には脅すような雰囲気はなく、社会的階級からの要求以外の教育的要求もない。乳母は子どもと遊んでいるのであって、教育しているのではない。少なくともこれが、瞬間的印象でこの絵が伝えようとしていることである。

1625年、ペーター・パウル・ルーベンスは、家族と離れて子どもがひとりである肖像画、*Infant With A Bird* を描いた (Bedaux & Ekkart, 2001, p.123)¹⁵ (次頁)。この絵は大変子どもらしい瞬間をいきいきと描いている。具体的に言えば、喜び、驚きそして時間を超越しているかのような興奮が入り交じっている。ひもの上の鳥は今にも飛んで行きそうに見える。しかし鳥の足はひものに結ばれている。子どもは自分の力の範囲内で鳥を持ち、ともかく自分がしたいように遊ぶ。飼い慣らされたオウゴンヒワはおなじみのおもちゃだったので、飛ぶ鳥のメタファーはまったく現実的に受け止められた (p.124)。ルーベンスはもともと天使を描きかかったが、この絵の中で見るのは、鳥を自由にさせる瞬間に全く夢中になっているように見える子どもである。天使には性別がない。この点では、ルーベンスは彼のももとの意図を保っている。この絵は、子どもが男の子か女の子かは示さないままになっている。私たちは一人の子どもを見る。しかしその子どもはキリスト教の意味での「神聖な子ども」ではない。

しかしながら、この時代の教えを考慮するならば、この絵のなかにシンボルを見つけることができる。天使の手中のオウゴンヒワは、キリストへと帰る人間の魂の完全なシンボルと見なすことができる (Bedaux & Ekkart, 2001, p.124)¹⁶。さらに、サンゴで作られた子どものネックレスは教育的に解釈される。古代からサンゴはお守りの力を持っていると言われてきた。サンゴのネックレスは子どもを危険から守ると言われている。同時に、サンゴはまた、象徴的な役割を持っている。サンゴは改良や改善の象徴であり、それゆえ教育の成功を予感させるからである (p.124)。しかしこの絵が訴えていることで最も印象的なのは、最大の集中をして、遊びの対象以外の何ものにも注意を払わず、ほとんど息を凝らしている子どもの印象である。これは、「その」子どもがおそらくルソーによって発明されるよりも100年以上前の、全くの子どもである。

1654年のヨハネス・フェルスブロンクの絵は、この印象をさらに強く訴えている。*Boy Sleeping in a High Chair* (Bedaux & Ekkart, 2001, p.227)¹⁷ (9頁)の中で、子どもは食べながら眠っている。彼は、その状況



Peter Paul Rubens. *Infant with a Bird*. c.1624-1625. Oil on panel. Gemaldegalerie, Berlin, Germany.

がどうして生じたのかわからない哀れなネコに見つめられている。男の子の右手にはスプーンがあるが、それは今にも手から離れそうに見える。おそらくその子どもはうたた寝をし、深い眠りに落ちようとしている。いくらか傾いているように見えるが、その子どもはバ

ランスをとって、前に倒れないようにしている。この子どもはまさに男の子であって性別のない子どもではない。なぜならリネンで作られた長方形のえりは、1740年代のオランダでは男性の装いであって、女性や女の子は決して身に付けなかったからである。ここ



Johannes Cornelisz Verspronck, *Boy Sleeping in a High Chair*, 1654, oil on panel, private collection

には宗教的なシンボルは見られない。この男の子は、茶色縞のシルク帽の下に白のアンダーキャップをかぶり、横を蝶結びで結んでいる。これは神聖さを暗示するものではない。子どもの描写を単に支えるものにはすぎない。

いきいきした子どもについての見解は、美術だけでなく、新しく起こった児童文学のジャンルも方向付けた。19世紀において、若い読者を対象とした文学は、子どもが主人公として冒険をくぐり抜け、いきいきと活動するような体験ストーリーの中で発展した。彼らは善意の家庭教師に依存せず、幼稚園にも行かず、しばしば学校にも行かない。文学の中の想像上の子ども

は、支配的な教育理論とは無関係である。これらの本は、大人の教育者や教師の想像力ではなく、子どもや思春期の青年たちの想像力を形成するために書かれたのである (McGravan, 1999)。

イギリスの作家でキリスト教社会主義者であるチャールズ・キングズリ¹⁸の例を見てみよう。彼は成功した子ども向けの本、*The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land-Baby* (1862)¹⁹の著者である。キングズリは、その本を最も幼いわが子のために書いた。これはロマンチックな物語である。若い煙突掃除人のトムは、ある日屋根から煙突を通して降りて、清潔で美しい好きな少女エリーの家に入った。鏡を見て、トムは初めて、

汚れて真っ黒になった自分の体に気づいた。トムは急いで逃げて近くの川に飛び込んだ。ここで彼は、不思議な水中の世界を発見し、大地の子どもから水の子どもへと変貌する。

この物語は、変化をもたらす一種のオルタナティブな世界としての水中の世界の可能性を示している。



“He looked up at the broad yellow moon and thought that she looked at him.”? Jessie Willcox Smith. One of twelve color plates by Smith for Kingsley’s *The Water-Babies* in the illustrated 1916 edition published by Dodd, Mead & Company, New York.

水中の世界には不愉快なことなど何もない。そこには風変わりな人物がいっぱいいる。イギリスの子どもが忘れられない、舌がもつれるような名前を持った人物たちである。

• Mrs. Doasyouwouldbedoneby
• and Mrs. Bedoneyasyoudid

数年後、*Alice’s Adventures in Wonderland*²⁰の中で、ルイス・キャロルが、オルタナティブな世界を示す同じ様な物語を書いている。T.H. ホワイトも、魔術師マーリンによる若きアーサー王の教育について、物語 *The Sword in the Stone* (1936) において同じことを書いている。マーリンは未来から過去へと人生を生き、実際の時間に逆行している。これは子どもたちがしばしば不思議に思う疑問である。このような子ども向けの本は、ジャンルは分かれているが、常にロマン主義的な意味を内包している。これらの物語は常に旅か、または知られている経験とは異なる新しい世界へと導き入れる何らかの種類の発見についてのものである。最新のものとしては、C.S. ルウィスによる *The Chronicles of Narnia*²¹ がこれに属する。また5巻本の *Harry Potter* もそうである。

19世紀には、パラダイスのメタファーと結び付けられ、子ども時代を保護されるものとする、特定の子どもの絵を一般化することは、教育の文献の中でも普通のことになった。例えば、*Paradise of Childhood* (Wiebé, 1896) は、1896年にイギリスに幼稚園教育学を導入した本の題名であり、フレーベルの伝記を含ん

№ 1.

1853.



Die Gartenlaube.

Familien-Blatt. — Verantwortlicher Redakteur Ferdinand Stolle.

でいる。この本は子どもへの心情的な見方を示す良い例である。フリードリッヒおよびリス・フレーベルは、幼稚園文化を基礎付けた理想的な夫婦としていきいきと描かれており、幼稚園発祥の地は、イギリスの読者にとってロマンチックなチューリングゲンの森として紹介されている。

いきいきした子ども像の成り立ちを研究するためには、教育の文献に加え、大衆的な出版物—19世紀の大衆誌や「家庭の友」—も取り上げなければならないだろう。ここでは理論ではなくイメージが役割を果たしている。一般化された「子ども」の絵は、マス・コミュニケーションの一部になった。このことは、ドイツの出版史において最も有名な定期刊行物である *Die Gartenlaube*²² (ドイツの家族雑誌) (前頁) を見れば明らかである。挿絵の入った絵と本文との組み合わせは、ロマンチックなモチーフを使っているが、それは同時に家族の親しい感情の大衆的な表現を示している。ここでは子どもは家族の文脈の中でのみ守られ、いきいきしている。

明確に子どもや思春期の青年を対象にして書かれた雑誌を調べると、さらなる根拠を見つけることができる。これらの定期刊行物は、19世紀には広く流通し、多くの読者層を楽しませた。私は例としていくつかのアメリカの子ども向け雑誌を取り上げ、雑誌の表紙に書かれたイラストの中に明示された、いきいきした子どもへの変移を示すことにする²³。それらの雑誌の表紙は子どもに対する一般的な見方を表している。1820年から1880年の間、いきいきした子どもの描写に向かった漸進的な発展が見られる。そこではいきいきした子どもはもはや小さな大人として見られるのではなく、いかなる教育的オーラも伴わずに現れる。ここでは子どもは、ロマン主義の時代のように、哀愁を帯びて見られるのではなく、様式においてのみロマン主

義が呼び戻される刺激的な学習環境のなかに置かれる。

1827年5月、ボストンの *The Juvenile Miscellany* の雑誌の表紙は²⁴、家庭的な設定の中に二人の子どもを描いている。女の子は声を出して本を読み、男の子は注意深く聞いている。二人の子どもは、本や会話の中にある大人の教育的世界に喜びを感じているように見える。イラストの上に、今月号の記事がアナウンスされている。

“***** exert a prudent care,

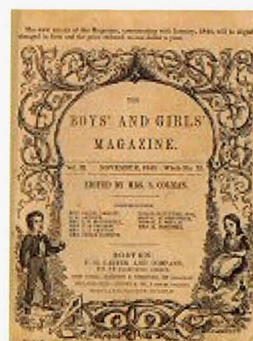
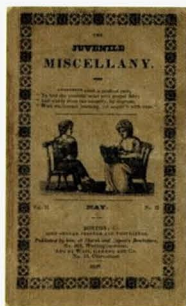
To feed the youthful mind with proper fare;

And wisely store the memory, by degrees,

With wholesome learning, yet acquir'd with ease.”

1836年6月にニューヨークとボストンで出版された、*Parley's Magazine*²⁵ の表紙には、両性の子どもたちが大人の男性によって本を使って教えられている様子が示されている。これは戸外の様子である。一人の子どもは自分の本を読んでいる。三人の子どもは男性が掲げた本を見ている。幾人かの子どもは自分のおもちゃを持っている。これは、いわゆる街頭教授 (*instruction on the street*) のようである。大人は何か本の内容を説明している。典型的な学校用具はない。男性は散歩用の杖を小脇にはさんでいる。彼は鞭を持っていないので恐れられていないように見える。同じことが子どもにも言える。戸外での教授が行われているが、彼らは当時のニューヨークの描写に登場するストリート・キッズではない。

1843年11月のボストン *Boys' and Girls' Magazine* の表紙は²⁶、女の子と男の子の教育領域が分かれていることを示している。左側の男の子は野球のバットを持って練習をしている。右側の女の子は本を読み、人形を抱えている。この二つの領域は花で飾られた縁取り

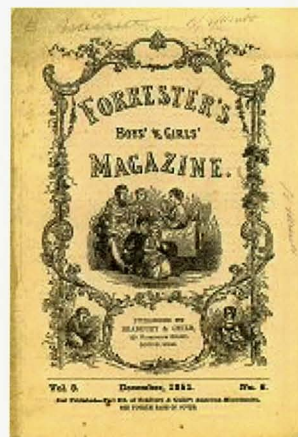
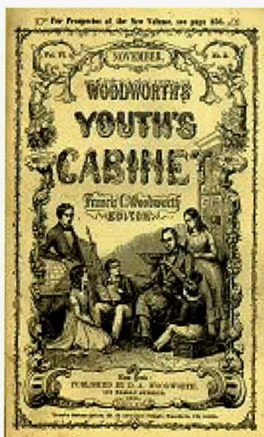
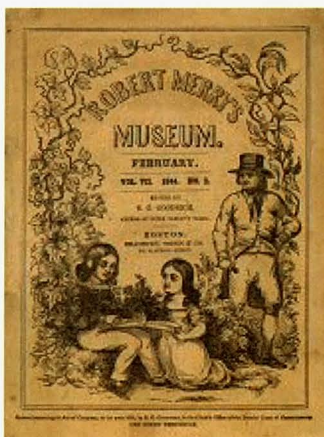




The 1865 Brooklyn Atlantics (Library of Congress)

でつながれているが、このことは二つの性はお互いに関連しているが、育ち方は異なっていることを示している。女の子は座っているが、男の子は立っている。女の子は目線を落としているが、男の子は目を大きく開けている。女の子は遠慮深く見えるが、男の子は挑戦的に見える。しかし両方とも子どもらしい雰囲気にも包まれている。ところで、野球ゲームの最初の公式ルールは、1845年に作られた。しかしゲーム自体は19世紀の初めから行われている一男の子によってのみ。1865年のNABBP選手権のチャンピオンたちの写真が示すように。

1844年2月のボストン *Robert Merry's Museum*²⁷ の表紙は、ロマンチックな読書シーンを表している。ルソー主義者のような監督者が後ろに立っているが、彼はまた子どもたちの父親かもしれない。男の子と女の子のどちらかが声を出して読んでいるのかはわからない。男の子は座っている。女の子は跪いている。おそらく女の子が男の子に何かを説明している。しかしこれはまだ学校の状況ではない。子どもたちは監督されているが、牧歌的な風景のなかに座っている。学習は自然であり、両性の関係も自然である。葉や枝で取り囲まれた植物の縁取りは、ここでは教育的関係を表している。大人の方は、家長を表している。

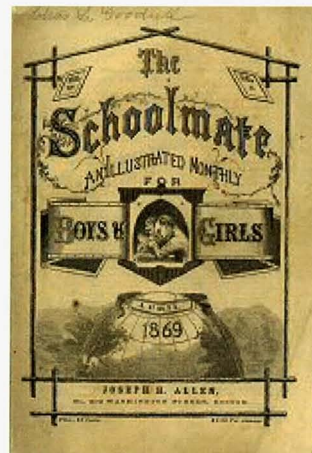


1851年11月にニューヨークで出版されたフランシス・ワーズワース²⁸の *Woodworth's Youth's Cabinet*²⁹の表紙(前頁)は、家庭での教育シーンを示している。家族全員が学習している。父親ははさみを磁石からつるして磁力を説明している。父親の後ろで、母親は注意深く聞いている。年長の息子は大きな地球儀によりかかっており、彼は明らかにすでに学生である。他の子どもたちは父親の講義を聞いている。一人の男の子は本から目を離し見上げている。女の子は跪いて父親を見つめている。小さな男の子は何か質問をしているように見える。このシーンもまた、花飾りによる囲いによって示されている。ところで、*Woodworth's Youth's Cabinet*は、進歩主義教育を暗示する次のようなモットーを掲げている。「楽しさは私たちの方法—教授は私たちの目的。」³⁰

1851年12月の *Forrester's Boys' & Girls' Magazine*³¹の表紙(前頁)は、男の子と女の子の二つの教育領域を、母親が教師として現れる教育家庭物語と結び付けてい

る。1853年4月の *The Child's Friend and Youth's Magazine*³²の表紙もまた、これら二つの領域が教育目的に応じて結合されうること示している。男の子たちと女の子たちが、それぞれの側で遊んでいる。科学や家庭生活に対する象徴は、明らかに性に割り当てられている。そしてS. G. グッドリッチ³³によって出版された *Merry's Museum* と *Parley's Magazine* が合併したときの、1854年10月の表紙³⁴は、家庭での教育のためのカリキュラムの全体を描いていた。しかし、科学は男の子のために準備されている。父親は講義を聞いている。母親と娘達は芸術的な事柄で忙しくしている。

1869年4月の月刊誌 *The Schoolmate*³⁵の表紙は、男の子と女の子の学習のための家を示している。両者とも世界に開かれている。男の子と女の子は一緒に本を読んでいる。*The Schoolmate*の初期の号は、ニューヨークで出版されたが、1853年1月には³⁶、家庭ならびに学校における発見学習の原理を示していた。ここにはまた両性間の明らかな区分が見られる(次頁)。



Cover for 1869



Cover for 1853-1854

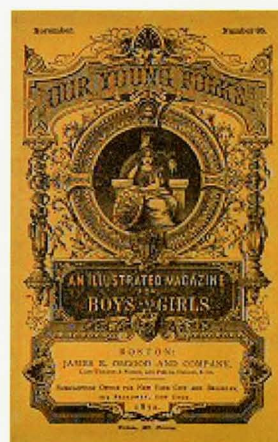
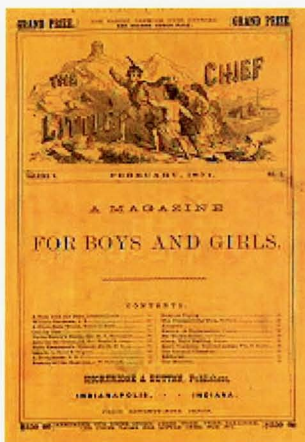


1870年1月の雑誌 *The Little Corporal*³⁷には、背後の忠実な仲間とともに、祖国を守ろうとする小さな兵士が描かれている。中央の鷲の絵は、「オールド・エイブ」である。それは第8ウィスコンシン連隊歩兵中隊の実際の戦争時のマスコットであり、南北戦争で有名なシンボルになった³⁸。同年の10月、*The Children's Hour*³⁹は、家族の牧歌的なシーンと、同時に母親によって読まれる読み物の教育的で娯楽的な状況を示した。*The Little Chief*は、少年少女のためのもう一つの雑誌であるが、1871年2月に⁴⁰世界を発見する子どもの集団を示した。彼らは山に勢よく向かい、背後の都市を離れる。ここで私たちは「発見学習」という言葉が現れる前に、それが存在していたことに気づく。

これら最後の例は、こうした教育的文化がどのようにして広く行き渡ったかについて示すものである。雑誌 *The Little Chief*は、インディアナポリスでショート

リッジとバトンによって出版された。*The Children's Hour*は、フィラデルフィアでT.S.アーサーによって出版された⁴¹。そして *The Little Corporal*は、シカゴでアルフレッド・L・スーエルによって出版された⁴²。この種の最初の雑誌は、もっぱらボストンやニューヨークで出版されていた。教育的な定期刊行物の市場は、19世紀の進展とともに広がっていった。絵はしっかりと定着した。1869年にボストンの定期刊行物 *Our Young Folks*⁴³は、アンティークな様式で子どもを中央に描いた挿絵を特集した。王座に小さなプリンセスが座っているのが見える。これはもはやロマン主義の子どもではない。このプリンセスのモチーフは、同時期のドイツの娯楽小説の中にも表れている⁴⁴。

19世紀において、アメリカの子どもたちは実際にはどのように見えただろうか。ここに初期のころの写真がある⁴⁵。そこには、挑戦的な幼い女の子、また年



若いレディ、考え深そうなポーズを取っている小さな子ども、写真スタジオの背景によりかかって疲れた様子でいる子どもが見られる。ロマン主義的な写真は見つけられないだろう。子どもの経験の中で子ども時代は、センチメンタルではない。それは今日まで大人によって作られた性質である。いきいきした子どもが教育理論に取り込まれたとすれば、それは心理学の単なる適用ではなく、大人の想像と教育的意図における複合的変容である。この変化は、大衆的な出版物における変化として説明することもできる。—しかし、特定の理論や特定の教育学者から生じたものとして説明することはできないのである。

参考文献

- BARBAULD, A.L.: *Hymns in Prose for Children*. London: J. Johnson 1781.
- BARBAULD, A.L.: *On Education* (1797). In: *The Works of Anna Laetitia Barbauld, with a Memoir of Lucy Aikin*. London: Longman, Hurst, Rees, Orme, Brown and Green 1825, S. 305-320.
- BEDAUX, J.B./EKKART, R. (Eds.): *Pride and Joy. Children's Portraits in the Netherlands 1500-1700*. Amsterdam/New York: Ludion Press Ghent, Harry N. Abrams 2001.
- BURR, S.: *Inspiring Lunatics: Biographical Portraits of the Lunar Society's Erasmus Darwin, Thomas Day, and Joseph Priestley*. In: *Eighteenth Century Life* Vol. 24, No. 2 (Spring 2000), pp. 111-127.
- DAY, Th.: *The History of Sandford and Merton. A Work Intended for the Use of Children*. London: J. Stockdale 1783-1789.
- Dewey, J. (1907). *The School and Society*. Chicago: University of Chicago Press.
- DEWEY, J.: *Pädagogische Aufsätze und Abhandlungen* (1900-1944). Mit einem Vorwort neu hrsg. v. R. HORLACHER/J. OELKERS. Zürich: Verlag Pestalozzianum 2002.
- EDGEWORTH, R.L./EDGEWORTH, M.: *Practical Education*. Vol. I/II. London: J. Johnson 1798.
- HOFER, Chr./OELKERS, J. (Hrsg.): *Schule als Erlebnis. Vergessene Texte der Reformpädagogik*. Braunschweig: Westermann Schulbuchverlag 1998.
- KINGSLEY, Ch.: *The Water-Babies: A Fairy Tale for a Land-Baby*. Illustrated by J. Willcox Smith. New York: Dodd, Mead & Company 1916.
- MCGAVRAN, J.H.: *Literature and the Child: Romantic Continuities, Postmodern Contestation*. Iowa City: University of Iowa Press 1999.

- ROUSSEAU, J.-J.: *Oeuvres complètes*, éd. B. GAGNEBIN/M. RAYMOND, t. IV: *Emile. Education – Morale – Botanique*. Paris: Editions Gallimard 1969.
- The Works of Maria Edgeworth*, Vol. 11: *Practical Education*. Ed. by S. MANLY. London: Pickering & Chatto 2003.
- VOLTAIRE: *Correspondance*, tome 4: Janvier 1754 à Décembre 1757. Paris: Gallimard 1978.
- WIEBÉ, E.: *Paradise of Childhood. A Practical Guide to the Kindergarten*. Quarter Century Edition. Ed. by M. BRADLEY. Including *A Life of Friedrich Froebel* by H. W. BLAKE. Profusely Illustrated. London/Liverpool: George Philip & Son, Philip, Son & Nephew 1896.

註

- 1 RICHARD LOVELL EDGEWORTH (1744-1817), was the son of a large landowner owning properties in Ireland. Edgeworth studied at Trinity College in Dublin and later at Oxford University. He became known as a designer and inventor; he invented various machines, including a land-measuring machine, turnip cutter, and carriages. He made his first visit to Lichfield (Staffordshire) in 1770, the center of the English Enlightenment philosophers. Edgeworth returned to his estates in Ireland in 1782. He experimented in electricity and was a pioneer in telegraphy.
- 2 MARIA EDGEWORTH (1767-1849) was the eldest daughter of Richard Lovell Edgeworth and his first wife Lovell married a total of four times, producing a family of 22 children. Maria was educated in London until the age of fourteen. In 1782 she returned to Ireland with her father and acted as his chief assistant and secretary in the management of his estates. Her first publication was *Letters to Literary Ladies* in 1795, a treatise in defense of woman's education. Her first novel, *Castle Rackrent*, published in 1800, was an immediate success. She became one of the most influential and respected writers in England in the first half of the nineteenth century.
- 3 <http://www.lunarsociety.org.uk/history.html>
- 4 The first formal meeting of the Society was on December 31, 1775.
- 5 Erasmus Darwin (1731-1802) studied medicine in Cambridge, practiced first in Edinburgh and then opened a private practice in Lichfield in 1756. Darwin published extensively in many scientific fields. In 1787 he translated Linné, and in 1797 he published a study of woman's education (*A Plan for the Conduct of Female Education in Boarding Schools*).

- 6 James Watt (1736-1819) worked as a maker of scientific instruments for the University of Glasgow starting in 1757, where he learned the principles of heat and steam. In 1769 he registered a patent for "A New Invented Method of Lessening the Consumption of Steam and Fuel in Fire Engine." In 1774 Watt moved to Birmingham and collaborated with the industrialist Matthew Boulton (1728-1809), who marketed Watt's steam pump.
- 7 Joseph Priestley (1733-1804) was a member of the Dissenting Academy of Daventry in 1751. Ten years later he began teaching at Warrington Academy, where he wrote *Liberal Education for Civil and Active Life* (1765). In the book he stressed the importance of science, arts, modern languages and modern history and argued they were better suited than the classics for students heading for careers in commerce and industry. He also wrote *Essay on Government* (1768) at Warrington. In the 1770s he published numerous scientific works, including works on the nature and properties of gases. Priestley was the first to describe the properties of oxygen.
- 8 John Whitehurst (1713-1788) was a trained clockmaker and opened his own shop in 1736 in Derby. He also made scientific instruments, compasses, barometers, and hydraulic machines. But his main interest was in geology. In 1778 Whitehurst published *An Inquiry into the Original State and Formation of the Earth*, in which he described the strata of Earth and estimated the age of fossil finds.
- 9 Samuel Wyatt (1737-1813) worked as an architect and master builder in London from 1744. Wyatt was responsible for the neo-classical style in the building of industrial Birmingham.
- 10 Thomas Day (1748-1789) began the study of law at Oxford in 1764 and was strongly influenced by Rousseau. Day lived in Lichfield starting in 1770. Here he experimented with the education of two foundling girls that he adopted and tried to bring up as young ladies fit for him to marry. His hopes centered on the girl he renamed Sabrina, but the "Sabrina experiment" failed in 1771. His anti-slavery poem, *The Dying Slave*, was published in 1773 and became a best-seller. Day went on to support the American Revolution and work towards social reform in England. His children's book *The History of Sandford and Merton*, published in 1783, describes "natural education."
- 11 Anna Laetitia Aikin Barbauld (1743-1825) was educated in the home of her Presbyterian parents and taught Latin and Greek by her father, John Aikin (1713-1780), who was a schoolteacher and later theological tutor at the dissenting academy in Warrington. Warrington Academy was a center of natural sciences in England. Anna Laetitia Aikin was a close friend of Joseph Priestley (1763-1804) and his wife; Priestly also taught at Warrington and was the founder of modern educational theory in England. Anna published her first poems in 1771. In 1774 she married Rochemont Barbauld (died 1808), descendant of the French Huguenot refugees, who had come to Warrington in 1767. Together, the Barbaulds established a boarding school for boys, which they managed until 1785. Anna Barbauld became one of the most influential writers in England, who after 1790 also published social criticism and political tracts.
- 12 Anna Laetitia Barbauld (1781) *Hymns in Prose for Children*. London: J. Johnson. The genre of hymns for children goes back to Isaac Watts (1764-1748) and his publication *The Divine and Moral Songs for the Use of Children* (1715). Watts was headmaster at the Grammar School in Southampton.
- 13 The book (Day, 1783-1789), appeared in three volumes, together went through 140 editions up to 1870.
- 14 FRANS HALS (1580/84-1666): *The Infant Catharina Hooft with her Nurse*. c. 1619-20. Oil on canvas; 86 x 65 cm. Staaliche Mussen zu Berlin, Germany.
- 15 PETER PAUL RUBENS (1577-1640): *Infant with a Bird* (1614/1624/25) (oil on panel, 50, 8x40, 5cm) (Staatliche Museen zu Berlin, Preussischer Kulturbesitz) (Gemäldegalerie, inv. 763). There is a sketch of this painting from 1614. Rubens also painted his sons, including the famous painting, *Artist's Sons Albert and Nicholas* (Bedaux & Ekkart, 2001, p. 250).
- 16 The image appears in a sentence by the Antwerp Jesuit and poet Adriaen Poitiers (1605-1674). The source text (*Afbeeldinghe van d'eerste eeuw der societeyt Jesu*), however, was published only in 1640, the year in which Rubens died.
- 17 Johannes Verspronck (c. 1603-1662): *Sleeping Boy in a High Chair* (1654) (oil on panel, 96 x 75, 7cm) (private collection). The painting was rediscovered in 1988.
- 18 Charles Kingsley (1819-1875) studied first at King's College in London as a day student and then studied classical languages and mathematics at Magdalene College in Cambridge. Kingsley left Cambridge in 1842 to read for Holy Orders. In July of the same year he became curate and in May 1845 rector of Eversley Church in Hampshire. Kingsley responded to the

- working class agitation that climaxed in the collapse of the Chartist movement in 1848. The Chartist movement has sought radical reform of the English Parliament. His interest in the condition of the working classes led Kingsley to join with others to form the *Christian Socialist movement*, which represented the rights of workers. Also in 1848 Kingsley published his first literary works, which dealt with social issues. He came into conflict with the high church faction of the Church of England. Later in his career Kingsley wrote historical novels that extolled the Germanic people or their English Protestant descendants and heroicized the Anglo-Saxon Middle Ages. In 1860 Kingsley was appointed Regius Professor of Modern History at Cambridge.
- 19 *The Water-Babies* was an exceptionally popular fantasy serialized in Macmillan's Magazine 1862-1863 and then published as a book in 1863. There is a famous illustrated edition (Kingsley, 1916) with color plates by painter Jesse Willcox Smith (1863-1935), published in 1916 by Dodd, Mead & Company of New York.
- 20 Lewis Carroll (pen name for Charles Lutwidge Dodgson) (1836-1898) published *Alice's Adventures in Wonderland* in 1865.
- 21 C. S. Lewis (1898-1963): *The Chronicles of Narnia*. (1950-1956).
- 22 The family magazine *Die Gartenlaube* appeared from 1853 to 1944. Founded by the Leipziger publishers and author Ernst Keil (1816-1878), the periodical reached, with a circulation of 382,000 copies in 1876, more than five million readers. It offered regular contributions on the topics of bringing up children, children's medicine, and preventive health, thus functioning as an "aid" and "friend of the family".
- 23 Source: Pat Pflieger: A Small Gallery of Magazine Covers. On the Internet at merrycoz.org
<http://www.merrycoz.org/covers/COVERS.HTM>
- 24 *The Juvenile Miscellany* Vol. II, No. II (May 1827).
- 25 *Parley's Magazine* June (1836). The magazine was published from 1833 and 1844.
- 26 *The Boys' and Girls' Magazine* Vol. III, No. XI (November 1843).
- 27 *Robert Merry's Museum* Vol. VII, No. 2 (February 1844).
- 28 Francis C. Woodworth (1812-1859) was also a well-known author of children's books and a series called "Theodore Tinker's Stories for Little Folks" (12 vols., New York, 1854-58). His books for children include *The Diving Bell* (1851) and *The Holiday Book* (1853). The lyrics to a popular song, *The Song of a Snow Bird* (January 1858), were also written by Woodworth.
- 29 *Woodworth's Youth Cabinet* Vol. VI, No. 11 (November 1851).
- 30 *Woodworth's Youth's Cabinet* Vol. IV (1849) was published from 1846 to 1857.
- 31 *Forrester's Boys' & Girls' Magazine* Vol. 8, No. 6 (December 1851).
- 32 *The Child's Friend and Youth's Magazine* Vol. XX, No. 4 (April 1853).
- 33 Samuel Griswold Goodrich (1793-1860), son of a Congregational minister, was born in Connecticut. He published the illustrated annual *The Token* from 1828 to 1842 in Boston, and in 1827 he began, under the name of Peter Parley, to write his series of books for the young. He also wrote schoolbooks and contributed prose and poetry to numerous periodicals. A volume of his poetry was published in 1838, *The Outcast and other Poems*. His *Les Etats Unis d'Amérique* was published in Paris in 1852; *Recollections of a Lifetime* appeared in 1857. He was chosen a member of the Massachusetts State Senate in 1837, in 1851-1853 he was consul at Paris. With his books Goodrich earned a fortune (Obituary: New York Evening Post 9 June 1860, p. 619f.).
- 34 *Merry's Museum & Parley's Magazine* Vol. 28, No. 4 (October 1854).
- 35 *The Schoolmate. An Illustrated Monthly for Boys and Girls* Vol. 23, No. 4 (April 1869).
- 36 *The Schoolmate. A Monthly Reader for School and Home Instruction. New Series* Vol. II, No. 3 (January 1853). This periodical appeared between 1852 and 1854.
- 37 *The Little Corporal. An Original Magazine for Boys and Girls and for Older People who Have Profound Hearts* Vol. X, No. 1 (January 1870),
- 38 Old Abe died in 1881. The eagle appeared on the cover of *The Little Corporal* for the first time in March 1854.
- 39 *The Children's Hours. A Magazine for Little Ones* Vol. III, No. 4 (October 1870).
- 40 *The Little Chief. A Magazine for Boys and Girls* Vol. V, No.2 (February 1871).
- 41 T. S. Arthur (1898-1885) was a popular author during and after the Civil War. One well-known book by Arthur was *Ten Nights in a Bar Room and What Saw I There* (1854).
- 42 Alfred L. Sewell founded *The Little Corporal* in 1865. The first issue appeared in July. Sewell published the magazine together with Emily Huntington Miller, and they continued publication up to April 1875.

43 *Our Young Folks. An Illustrated Magazine for Boys and Girls* Number 53 (May 1869) (years of publication: 1865 und 1873).

44 E. Marlitt: *Das Heideprinzesschen*. Leipzig 1872. Marlitt's novel was published in 1871, first in serialized form in *Die Gartenlaube*. E. Marlitt is a pen name for Friederike Henriette Christiane Eugenie John (1825-1887), who was originally a valet and later active as a lady of society. Her first novel, *Goldelse*, appeared in 1866 and brought her sudden fame. In the 1870s she was the most successful contributor to *Die Gartenlaube*.

45 <http://www.merrycoz.org/CHILDREN.HTM,gallery>

【訳者解題】

本論文は、ユルゲン・エルカース氏が、2006年3月16日に、広島大学大学院教育学研究科で行った講演の本文の日本語訳と、原文（英語）の註である。エルカース氏は、1947年生まれ。1975年ハンブルク大学にて博士号（哲学）取得。専門は、教育哲学・教育史。現在、スイスのチューリッヒ大学教授（一般教育学）である。エルカース氏は、2006年3月から6月まで、学習開発学講座の客員教授として、広島大学に滞在した。客員教授として広島大学に滞在中の研究テーマは、「新教育の思想と実践の今日的再検討—ペスタロッチとデューイを中心に—」であった。この講演は、彼の客員教授就任を記念するものであり、エルカース氏自身の最近の研究テーマ・関心を紹介する趣旨でなされたものである。

本論文で、エルカース氏は、進歩主義教育のスローガンの一つと考えられる「いきいきした子ども (active child)」という観念が、例えば19世紀末から20世紀にかけてのデューイの「子ども中心の教育」といった主張に端を発するかのようになっている教育学の一般的傾向に異議を唱え、「それは新しいものではない」と言う。いわゆる「新教育」は、それ自体が主張するほど新しいものではない。それが、本論文でエルカース氏が指摘しようとする基本的論点である。

その証拠として、エルカース氏は、まず18世紀後半のイギリス啓蒙主義の文献を取り上げる。例えば、デューイの100年前に、エッジワースの『実践的教育』では「発見学習」や「なすことによって学ぶ」といった学習についての見方が提示されているし、イギリスの詩人アンナ・ラティシャ・バーボールドの著作においては、自分自身で自らの信念を問う「いきいきした子ども」像が描かれているのである。さらにバーボールドは、教育についての書物で、「教育」を「経験」と見なしているというのだ。まさにデューイの先取りである。また、教育理論展開（応用）の事例として、18

世紀の児童文学を取り上げる。ここでの教育理論としてはルソーが問題となっているが、ルソーが「いきいきした子ども」を理論（教育学）化したなどという通俗理解を否定し、むしろ、多くの児童文学の中にこそ「いきいきした子ども」への現実的なまなざしが存在していたことを、エルカース氏は明らかにしようとするのである。このルソーとの関連で、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルが進歩主義教育を基礎付けたなどという、これまた教育学の通俗理解が流布していることを取り上げ、それは深刻な誤りであるとエルカース氏は言う。講演の後の質疑応答で、この点に関する質問がフロアから出されたが、その流布は世界的な傾向であり、その原因は教員養成教育にあると、エルカース氏は明言した。初等・中等学校の教員養成のために、ルソー、ペスタロッチ、フレーベルを神話化する分かりやすい通俗説が、どうしても必要だったというのである。

論文の後半、エルカース氏の研究の視線は、文献ではなく、絵画などの図像に進められる。エルカース氏によれば、17世紀の、オランダのフランス・ハルスやヨハネス・フェルスプロンク、フランドルのルーベンスの絵画に、「いきいきした子ども」という子ども理解が見て取れるし、さらに、19世紀の大衆的な出版物、雑誌の表紙などの図像にも、教育をめぐる世界や物語を読み取ることができるのである。

エルカース氏は、従来の教育学でビッグネームとして流通しているルソー、ペスタロッチ、フレーベルなどに安易に依拠して教育について語ることを止め、むしろ、これまで省みられずに歴史の中に埋もれている文学や絵画や雑誌などの、図像を含めたテキストを発掘する考古学的な問題提起をしていると捉えることができるであろう。と同時に、ルソーなどの古典的なテキストを、改めて本当の意味で読み直すことも、今、教育学の領域でなされなければならないと、エルカース氏は考えている。彼は、広島大学大学院教育学研究科の学習開発学講座に滞在中、ルソーについての英語の本を執筆していた。ドイツ語を母国語とする自分が、日本という極東の国で、フランスの思想家ルソーについて、英語で本を書いていることの不思議さを、楽しんでいたようである。ルソーは教育学の古典のように見なされているが、本当にルソーは読まれているのだろうか、と彼は言う。ルソーを引用しているデューイでさえも、ルソーを読んでいないのではないかと、エルカース氏は言う。彼の最近の研究テーマ・関心を簡潔に示した本論文は、そうした挑発的な問題提起も、われわれに対して行っているのである。

（樋口）